



夏目漱石の病歴と生活（四）

広島文化学園大学大学院看護学研究科
森下恭光

■ 緒言

第四稿となる本稿の主題は、明治四十年四月から明治四十三年十二月末日に至る間の、夏目の病歴と生活の実態を究明することにある。

この間、夏目の病歴としては胃病が深刻化し、いわゆる「修繕寺の大患」といわれる事態を迎えたことはよく知られているが、その間の経緯を明らかにして行くことが主題の1つになる。

次に夏目がこの時期において生活上の大きな転機を迎えたことがその後の生活にどのように影響することになるかを明らかにすることがもう1つの主題になる。生活上の転機として最も重要なのは東京帝国大学、第一高等学校での教職を辞し、朝日新聞社へ入社し職業的作家としての生活を始めることになったことである。

■ 職業作家としての出発

明治四十年三月二十日付の第一高等学校退職辞令、同年四月二十三日付の東京帝国大学退職辞令を受け、夏目は教職の世界を去り、朝日新聞社という職場を得て、念願の文学創作を職業とするようになる。五月三日付の朝日新聞紙上に発表された「入社の際」の中に、「文芸上の述作を生命とする余にとって是程難有い事はない是程心持ちのよい待遇はない、是程名誉な職業はない。」¹⁾と記し、その心境をやゝ誇張して記している。誇張と見えるのは、前職の帝大教員という境遇と暗に比較して、現職を「名誉な職業」と強調するところに象徴される。

しかし、誇張ではあっても偽りではなかった。同月二十九日付で熊本在住の奥太一郎に宛てた書簡には、「小生大学退職後小説家と相成り講義の必要もなく又高等学校の調の為めセンチリー（注・辞書名）の厄介になる事もなくなり心中大に愉快に候。」²⁾と退職後の心境を語っていることからそれは確かめられる。

さて、夏目入社後の第一作は「虞美人草」³⁾であった。六月四日付の小宮豊隆宛の葉書に「今日から愈虞美人草の製造にとりかゝる。何だかいゝ加減な事をかいて行くと面白い。」⁴⁾とその意気込みを記している。

翌日の六月五日、夏目の長男純一が誕生する。五番目の子どもで、それが初めての男児であったこともあり、夏目の喜びは大きく、妻の鏡子によれば、長女の筆子の話として、夏目が「男の子だ男の子だ」⁵⁾と喜んでいたという。

「虞美人草」は六月二十三日より「東京朝日新聞」、「大阪朝日新聞」両紙に掲載が始まる。「虞美人草」を創作中は、すべてに優先してその執筆に専念する。その意気込みは、八月五日に鈴木三重吉に宛てた書簡に、鈴木への旅行への誘いに対して「旅行も大事だが「虞美人草」は胃病よりも大事だから其辺はどうか御勘弁を願いたい。」⁶⁾と記していることによっても知られる。ここで胃病について触れる文言が見

もりした やすみつ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学大学院看護学研究科

られるが、この時期、慢性的胃病に悩まされていたらしいことは九月二日付で畔柳都太郎に宛てた書簡に、体重が12貫500両（46.9キログラム）から250両（0.94キログラム）減ったことを記した後に、「胃が悪クテイケナイ。」⁷⁾と伝えていることによって明らかである。

「虞美人草」は九月二日の時点で脱稿したことが同日の畔柳宛の書簡に告げられている。そして、新聞の連載は、「大阪朝日新聞」が十月二十八日に、「東京朝日新聞」が十月二十九日に終わっている。

この間、九月二十九日に夏目は住居を本郷区駒込西片町から牛込区早稲田南町7番地（現新宿区早稲田南町7番地）へ移転す。そしてこれが夏目の最後の転居となる。家賃は35円で、350坪程の敷地に古いながら手頃な家が建っているというものであった⁸⁾。

さて、この年の六月初旬に着手し、約3カ月を費やし、すべてに優先して、その創作にエネルギーを注ぎ込んで九月初旬に脱稿した「虞美人草」は、いかなる主題のもとに描かれたものであったか。それは朝日新聞入社後の第一作、すなわち職業作家としての夏目の第一作であったことを考えれば特別の意味を持つと見るべきであろう。

岡崎義恵によれば、『「虞美人草」の主題は藤尾と其母とによって形造られる「我」「私」の世界に対して、甲野欒吾や宗近一族によって形造られる「第一義」の道義的世界が戦う状態を表現したものである。そうして「我」「私」の世界の敗北に終る所の勸懲小説、即ち一種の詩的正義を表現したものであると考えることが出来る。⁹⁾とされる。このようなとらえ方は岡崎に限らず、かなり一般の見方であるともいえ、勝本清一郎も「漱石には人間の自然性や欲望やエゴイズムを素直に肯定できない精神タイプがはじめから終わりまでありました。いわば儒教的生活態度です。」¹⁰⁾とその創作態度の特質を指摘している。荒正人は「虞美人草」の登場人物に見られる類型性を初期の作品である「坊っちゃん」に見出している。

とも角、ここに指摘されている「虞美人草」に見られる勸善懲惡的作風は、文学を単なる趣味的表現として見ず、教化的意味を発揮させるべきものとする夏目にとって自然な結果であったと考えられる。しかし、いわば理念先行的なこの作品は、後になって作者自身が非常に嫌ったらしいことを荒正人は紹介している¹¹⁾。

この時期の夏目の健康状態とくに精神状態について妻鏡子はとくに触れていない。夏日も胃の具合について触れることはあっても多くは語らない。夏目家にとっては、十一月の末日近くに荒井某なる青年が紹介状なしで訪れ、やがて住み込み、翌年の四月三日まで滞留する¹²⁾。この青年は「坑夫」の素材を売り込むなどし、種々トラブルを起こす。

■ 「公」の生活、「私」の生活

夏目における「公」の生活は、朝日新聞社員としての創作活動に象徴される。明治四十一年一月一日より四月六日まで東京・大阪の朝日新聞に連載された「坑夫」¹³⁾は朝日入社後の第二作で、この作品の成立事情は第一作のばあいと異なり、前出の荒井某がかかわり、素材提供という特殊事情が制作の背景にあり、そのころは、夏目のこの作品に関する自己評価を複雑なものにしている。

「私」の生活部分として最初にあげるべきは夏目の健康状態である。すでに触れたように胃については慢性的なものになっており、夏目自身、書簡などによって告白しているところである。しかし、その胃病に加えて新に他の病名が告白されている。

一月二十二日付で菅虎雄に宛てた書簡に「小説（注・「坑夫」）がまだ済まないんで何処へも出ない。時に僕例の胃病で一寸医者に見てもらったら小便を試験して是は糖分があるというコイツには参ったね。」¹⁴⁾とあることによって、胃病の他に糖尿病が発見されたことを告げている。

しかし、糖尿病はこの時期発症したものでないことは、夏目の死後行われた解剖結果について長与又郎が行った講演の中に「真鍋君（注・夏目の主治医・真鍋嘉一郎）ノ話シニ拠ルト三十八九年ノ頃ニ同君ハ夏目サンガ糖尿病デアルトヲ確メタソウデアリマス。」¹⁵⁾と述べており、糖尿病は四十一年に発症したのではないことが判明する。夏目と菅の関係を考えれば、ここで事実を曲げる必要はないので、この告白の仕方には疑問が残る。

菅虎雄に、夏目は自身の不調に加えて、三女の栄子が口腔炎で口が腫れて悲鳴をあげるのを見ると気

の毒でたまらず、「小説が一枚も書けなくなる心境にある」ことを告げ、更に妻まで寝込んでしまっている窮状も訴えている¹⁶⁾。

次に「私」の生活としてあげられるのは門下生との関係である。門下生の中でとくに森田草平と小宮豊隆がこの時期、夏目の「私」の生活に大きな位置を占める。

まず森田は、同年三月二十一日、平塚明（注・雷鳥）と共に田端駅を出発、大宮を経て二十二日、西那須に向かい、奥塩原で一泊し、翌日死処を求めて雪の山中に入り、二十四日、尾花峠近辺を彷徨するところを保護され、二十五日帰京する。この事件は心中未遂事件として猟奇的に報道され、世間の耳目を集めることとなる¹⁷⁾。いわば窮地にあるこの森田を、自宅に引き取り、世間から隔離し保護するという処置を夏目はとる。この事件を小説に書くことをすすめたのも夏目で、後に朝日新聞に「煤煙」として明治四十二年に連載される。森田によれば、「煤煙」を書くことを決意した森田に対して、夏目は「そりゃ書くがいゝ、書くことは君にも許されるだろう。書く外に、今後君が生きて行く道はないのだからね。」¹⁸⁾と云われたという。一見冷たいことばに見えるこの言い方も事件後の動揺が収まらない森田に「一日も早く大地へ足の着くようにして遣ろうという思召しであったに違いない。」¹⁹⁾と森田自身によって解釈されるものであった。

小宮豊隆は森田が明治十四年生れであるのに対して明治十七年生れであり、専攻は独文学であったから英文学を専攻した森田と違い直接の教え子ではない。しかし、夏目に傾倒する点においては森田に劣らず、夏目も森田とは異なる次元で小宮を受容した。

明治四十一年における小宮がいかに夏目に傾倒していたかは、夏目宅への頻繁な出入りという事実を見れば容易に首肯されるであろう。小宮は、他の門下生と同様に木曜日に面会日として夏目宅で開催された木曜会へは余程の事情がない限り出席した。それに加えて小宮は木曜会の開催日でない日でも夏目宅を訪ね時には宿泊することもあった。

夏目と小宮の関係は小宮の夏目への傾倒という一方的なものではない。それは、夏目から小宮へに宛て、この年に発信された書簡は計15通であり、その内11通は、葉書であるが、内容としては夏目から小宮に依頼するものが4通あり、中でも十二月二十日に発信されたものは長文の手紙で文壇事情に関する指導的内容が大半を占める²⁰⁾ ことによって明らかである。

夏目が九月一日より十二月二十九日まで東京・大阪の両「朝日新聞」に連載したのは「三四郎」²¹⁾ である。この小説に登場する主要人物の小川三四郎と里見美禰子は、それぞれモデルがあるとする見方があり、小川のモデルは小宮、美禰子のモデルは平塚明（雷鳥）とする説が存在する。その適否はとも角としても、夏目の「公」の生活としての創作活動に、「私」の生活の部分に属する森田、小宮とのかかわりが影響すると考えることができるという事実がこゝに一例として存在する。

「私」の生活に入れるべきものに十二月十七日の次男伸六の誕生がある。伸六と命名した由来は申年に生れた第六子ということにある。この解説は十二月二十六日付で高浜清に宛てた書簡の追伸²²⁾ の部分に記されている。

■ 胃の不調—重症化の予兆

前年の明治四十一年は胃病の他に糖尿病が加わったが、健康状態としては深刻な事態には至らなかった。しかし、明治四十二年になると、夏目はしばしば胃の不調を訴えるようになる。

一月十七日付で林原耕三へ宛てた葉書に、「胃病よろしからず」²³⁾ の一行がある。また、三月二十四日の日記には、「夜腹中違和。苦しき為め屢ば眼を醒す。半夜妻に懷爐を作ってもらふ。その為寝る事を得たり。」²⁴⁾ と記し、翌日の日記にも「気分あし。食欲皆無。」²⁵⁾ と記す。さらに翌日の二十六日の日記にも「夜胃又不安、灰炉を抱いて眠る。」²⁶⁾ とあり、三月三十一日の日記にもやはり胃病に触れ、「胃病安眠を害す」²⁷⁾ と記す。胃の不調に触れる記事はこの後もつづき、四月四日には小林医師の往診で胃を見てもらふ。このことについて夏目は、「胃も腸も無論わるい。肝臓もわるいらしい。右の肺の下部が薄弱だそう。からだのうちで何処も健全な部分はない様だ。」²⁸⁾ と記す。

このような記述を読む時、夏目は自身の健康について自信が持てないながら、医師の診察を受け、そ

の診断を得ても、それに対する反応が他人事であるような印象を与えるところがある。とくに四月四日の記述を見る限り往診の医師がここまで診断できるものかと疑われるくらい多様な病名をあげている。医師が往診先でこれだけの診断をするとは思えない。そこに夏目の不可解な特性が見られる。

夏目の健康状態の外に夏目の生活に影響を与える要素に家族の健康状態がある。この時点で夏目の家族は、彼の妻と子供6人を加え8人になっている。

四月二十一日付の日記によると妻の鏡子が不調を訴え、翌日小林医師の診察を受け子宮内膜炎の診断を受ける。日記によればこの日四女の愛子と長男の純一も不調で二十三日には共に発熱という事態に陥る²⁹⁾。家族の健康状態が安定するのは、四月二十七日の日記によれば、「細君の病気軽快。」³⁰⁾とあることによって四月の末であることが確認される。

以上見て来たところによっても明治四十二年は年頭より夏目自身、そして、その家族の健康状態に問題を抱えることが多かった。しかし、それにもかかわらず夏目は朝日新聞社に勤務する公人としての役割は勤勉に果たしている。明治四十二年一月一日に始まり三月十二日まで連載された「永日小品」³¹⁾はその主なものである。とくに「変化」と題する小品には中村是好との交流を学生時代に遡って回顧し、その中村が現在は満鉄の総裁になっていることを紹介している³²⁾。中村は明治四十一年から六年間南満州鉄道会社（略して満鉄）総裁の職にあった。

この中村に夏目は、この年の七月に会い満韓旅行に招待されることになる。

六月に入ると、六月三日に始まり四日、五日、六日、八日と連続して歯医者に通院している³³⁾。この間、五月三十一日より書き始めた³⁴⁾小説「それから」³⁵⁾は六月二十七日から連載が東京・大阪の両「朝日新聞」で始まる。連載は十月十四日で終了。夏目が「それから」という題名を選んだのは、「三四郎」のそれから後の男という設定での創作という意図を反映させるためであった。

八月十八日、中村是好より満州へ行くか否かの最終問合せがあり、夏目は行くとの返事を郵便で出す³⁶⁾。しかし、直後の八月二十日、激しい胃カタルを起し、「面倒デ死ニタクナル。」と記す³⁷⁾。結局、医者への反対もあり、満州行きの延期を電話で中村に伝える³⁸⁾。夏目の満州行きは九月三日の鉄嶺丸乗船によって始まる。九月六日、大連着。中村に会う。大連に始まり、釜山に至るこの旅は十月十七日に終り、その旅行記は、「満韓ところどころ」³⁹⁾と題して、東京・大阪の両「朝日新聞」に明治四十二年十月二十一日より十二月三十日まで掲載される。この旅行記はその記述を撫順についての記述で中止させている。終末に「茲処まで新聞に書いて来ると、大晦日になった。二年に亘るのも変だから一先やめる事にした。」⁴⁰⁾とあり、余韻を残す終り方をしている。

夏目がこの旅行を終えて帰国したのは十月十七日であったから、帰国後に書かれたものということになる。

この旅行記はその内容については、単なる見聞録、旅行先における交友録以上のものではないとの批判の他、民族的差別観がうかがわれることから、その面からの非難をする評者もある。こゝではそのことも度外視できないことは認めながら、本論文の主題である夏目の病歴という点でこの作品を読むと、旅行中に時々胃病、腹痛に苦しむ記述があることに気付かされる。

旅行中の胃病腹痛等の体調不良についての記述を日記によって確認すると当然のことながらそれは、「満韓ところどころ」における記述に符合するところがある。

八日、「胃悪し。」十二日、「腹痛。」十三日、(馬場より)「腹が痛くて引き返す。」十四日、(望小山近くで)「腹が痛んだ。」十七日、「先刻から腹痛十二時半に杉原氏へ行く約束があるのを断る。」⁴¹⁾この後しばらく胃の不調についての記述がなく、十月八日、「腹痛帰る。」⁴²⁾と記す。夏目にすれば、腹痛が帰って来たという感じであった。その後の記述では、帰国後、京都の嵐山で「腹痛し。」の記述があり、数行後には「腹の痛やむ。」と記す。しかし、同日帰宅したところで「腹痛む。元気なし。」⁴³⁾とも記している。

以上によって、満韓の旅は、胃痛、腹痛に悩まされながらの旅でもあったことが確認される。しかし、夏目はそれによって旅行を中断させてはいない。

■ 胃腸病院入院

明治四十三年三月一日より六月十二日まで東京・大阪の両「朝日新聞」に連載されたのは「門」⁴⁴⁾と題する小説で、「それから」の続篇と見なされることが多い。したがって、「三四郎」,「それから」,「門」は連続する作品、つまり三部作と見られることが多い。

明治四十三年一月二十一日付でベルリンに滞在中の寺田寅彦に宛てた書簡に「もう少しすると又小説を書き出さなければならぬ。」⁴⁵⁾とあるところから、時期から推してこの小説は「門」を指すことは明らかであり、この頃には構想を練り始めていることがうかがわれる。

荒正人によれば夏目が「門」を書き始めたのは二月下旬で、執筆中も体調が良くないので、日に一回ずつ書いたという⁴⁶⁾。

三月二日、五女ひな子誕生。このことを夏目は先の寺田寅彦宛に三月四日付で送った書簡で「又女が生まれた。僕は是で子供が七人二男五女の父となったのは情ない。」⁴⁷⁾と夏目独特の知らせ方をしている。

この時期の体調については、三月二十九日付の鈴木三重吉宛の書簡に「小生は胃の加減わるく気に任せて長く筆を執ると疲労する故大抵毎日一回位で胡魔化し居り候。」⁴⁸⁾とあるところから、昨年につづきこの年も胃の不調がつづいていることが知られ、さらに、五月十一日付で皆川正禮に宛てた書簡には「近頃身体具合あしく書くのが退儀にて困り候早く片付けて休養致し度、今度は或は胃腸病院にでも入って充分治療せんかと存候」⁴⁹⁾とあり、病院への入院治療も念頭に入れていることがうかがわれる。夏目はこの時点まで、胃病について医師の診察を受け、診断の結果、相応の処置は受けて来ているが、入院治療という対処を口にするのは例外的である。そのことによっても胃病の進行の度合が相当に高まっていることが推測される。

そしてついに六月十八日付で安倍能成に宛てた書簡には、「十日程前決意長与の胃腸病院へ参り候処胃潰瘍の疑にて遂に入院する事に相成明十八日より転移致候いつ出るか分りかね候。」⁵⁰⁾と書き、いよいよ入院治療の事態に至ったことを告げている。そして、十八日に入院した夏目は七月三十一日に退院する。その間、日記は一日も欠かさず書いており、とくに七月十日、七月十五日の日記は詳しく、十日の日記は1200字を越え、十五日の日記に至っては1500字をはるかに越えている⁵¹⁾。手紙は毎日ではないが12通出している。このことは、夏目の旺盛な表現欲、伝達欲のあらわれと見ることができるし、他面、この時点ではまだそれだけの気力と体力があった証拠にもなる。

闘病生活という拘束的生活の中であって、夏目がいかに自己を省察し、把握した上で外部へ向けて発信しようとしているかを計る資料として、日記と書簡は貴重な意味を持つ。

以下に日記と書簡によって闘病中の夏目の精神面・肉体面の様相を把えて見たい。

六月十八日、入院の初日の日記には、病院の食事、部屋の環境を客観的に描写。大小便の扱い、窓外の風景、来客者名が事務的な記述法で記されている⁵²⁾。しかし、十九日には早速夏目の自我が表出され、入浴を申し出るが看護婦に拒絶され、理由が分らず苦笑する。また上掛一枚を「ケンドン」なりと不平を洩らして⁵³⁾。六月三十日の日記には杉本医師の療法についての解説を記し、療治後血がとまってから2週間後に腹を蒸すのが胃潰瘍の療法でその後は火ぶくれの様に色が変わると云うのに対し、腹だから差支えないかろうと答えたことと記す⁵⁴⁾。杉本医師とのこのやりとりの情景は容易に想像できる。つまり、夏目は火ぶくれはできてはそれでもそれは腹だから他人の眼に入らないから気にならない、と、多分、笑いを浮かべながら幾分のサービス精神を発揮して云ったであろう。

七月一日の日記には腹を蒸す治療が始まり火ぶくれを見た杉本医師が治療の成果と賞賛するのに対し、「病院だから火ぶくれを拵えて賞められるのだろう。」⁵⁵⁾と皮肉を放っている。夏目の観察眼は病院の中にいる人物にも容赦なく向けられ、とくに看護婦や他の患者に対してそれが著しく、七月十日の日記では、「例の髪を茶煎にした東のはずれの女今朝も（注・七月八日の日記でも眼にしている。）洗顔所にて顔を洗う。つき添二人、ばあさんに中年の年増しなり。いづれも上流の召使とも見えず。寧ろ田舎びたり。当人は霊の如くぬうたる顔とぬうたる態度にてやっている。」⁵⁶⁾と記し、観察の細かさや厳しさを見せている。夏目の日記で最も字数の多い七月十五日には、東から二番目の病室の王さんについての記述があり、彼が寝坊で看護婦からそのことを注意されていることや王さんと看護婦の会話を書きとめている。王「私

の顔色は今日は悪いでしょう」看「どうだか、何時も洗顔所で見ると丈だから、あそこへ行って見なければ分りやしない」王「夫じゃ仕方がない」看「王さんは丸で駄々っ子の様だ」⁵⁷⁾のような患者と看護婦の会話を克明に記す。ここに見られるのは患者の夏目ではなく作家の夏目である。日記も詳しく長くなる訳である。夏目の治療で菟藟を用い胃を蒸す治療は七月十四日で終了し、七月十九日には外出し髪を刈っている。七月二十一日の夜の日比谷公園散歩に始まり、以後、散歩は日課となり七月三十日には「退院してよろしかろうと云う。明日退院に決す。」⁵⁸⁾と記す。約1月半の入院生活は七月三十一日で終了。

日記が入院中毎日書かれ、その記述が細かく内容も率直であるのに対し、書簡は入院中は12通と通常時に比べると少なく、内容も病気に触れることはあっても簡略なものが多い。例外的に七月三日付で戸川明三（秋骨）に宛てた書簡には、「(入院後)二週間目より菟藟で腹をやくんだと云って火の様な奴を乗せられるので一驚を喫し申候。のみならず一日にて腹が火ぶくれに相成り見るも浅間しく恐縮の体に候。」⁵⁹⁾と菟藟治療の様子を伝えている。

■ 修繕寺の大患

七月三十一日に長与胃腸病院を退院した夏目は松根東洋城の誘いを受け、病後の静養の目的で八月六日に修繕寺の旅館菊屋に赴く。三島駅で松根と落ち合う約束で一人で向かった夏目であったが三島では松根に会えず結局一人で宿に入る。当日は別館に宿泊し、七日、約400メートル離れた本館に移る。

七日の日記によると、「胃常ならず」⁶⁰⁾とその異常を自覚し、八日には、「不快堪えがたし。中略。余にとっては湯治よりも胃腸病院の方遙かによし。」⁶¹⁾と書く。胃腸病院では一日も欠かさず日記を記した夏目であるが、今回は様相が異なり、内容に余裕がなく、日毎に病状が悪化して行くのを実感していることが文面から察しられる。十日、十一日、十五日、十七日、十八日は一行の記述もない。ついに八月二十日になって、十七日に吐血したこと、十八日に東洋城が社員1名と胃腸病院の医師1名が来ることを伝え、その夜2人が来たことを記す⁶²⁾。この間、妻の鏡子は八月十二日に松根より夏目の病状の報告を受け、いつでも来られる支度をして欲しいと伝えられてはいたが、夏目が電話口に出て話をした後、電報で来るに及ばないと打電したため菊屋へ急行することはしなかった⁶³⁾。鏡子が菊屋に入ったことを夏目の日記で確かめると、八月二十二日の記述に坂元、森成（医師）鏡子の3人が縁側で水瓜を食べたとある⁶⁴⁾。夏目の日記は八月二十三日で中断し、八月二十四日より九月七日までは鏡子が1日も欠かさず夏目の病状を記述する。

したがって、以下に記す夏目の病状は鏡子の日記によるものである。

八月二十四日夜八時、急に吐血し、その量は500グラムで、脳貧血を起し一時人事不省に陥り、カンフル注射15食塩注射を打ち、結果やゝ生気を取り戻すが皆が朝まで持たないと思った⁶⁵⁾、と記し、一時絶望的病状に陥ったことを明らかにしている。その後、二十五日から九月七日までは徐々に快方に向かい、九月八日からは夏目自身の日記が十月十一日まで1日も欠かさず記される。

十月十一日の日記に「愈帰る日也。雨濛々。人々天を仰ぐ。荷拵出来。九時出立の筈。」と記す⁶⁶⁾。この日夏目は馬車、汽車と乗り継ぎ、新橋停車場で娘3人を含む40人余の出迎えを受けた後長与胃腸病院に入院する。長与胃腸病院に長期入院した夏目は明治四十四年二月二十六日に退院する。

いわゆる修繕寺の大患と称される事態はこれまで見たところ、つまり、静養のため赴いた修繕寺「菊屋」での滞在が当初の目的に反する結果をもたらし、夏目の生命の危機を到来させることになったことを指す。そこで、以下にその夏目の生命が危機に瀕する事態に陥った八月二十四日を中心に考察を進めて行く。

八月二十四日に夏目が人事不省に陥った時、その現場にいたのは妻の鏡子であったから、まず鏡子の語ることによって確認するのが妥当である。鏡子によれば発作の始まりは「ゲェーッ」といういやな音を立てたことで、2度目に「ゲェーッ」という音を立てた時には直後に形容し難いいやな顔をして目をつりあげてしまう。と同時に鼻から血が滴り落ち、やがて鏡子につかまって夥しい血を吐き、顔面は蒼白となり、目はつり上がったまゝで脈もなくなる。そこで行われた処置はカンフル注射を十数本（注・日記には十五という数字がある）打つが依然として改善しない。そこで食塩注射をということになるが注射器がないので他のもので間に合わせるといって過程で脈が出て来て危機を脱する。鏡子の語るところ

によれば事態は以上のように進行し、一応終息したということである⁶⁷⁾。

夏日は事実において人事不省に陥り、その時間は30分であったことを鏡子から後に告げられるが自覚がないだけにそれが信じられないことを「思い出す事など」の中で「たゞ胸苦しくなって枕の上の頭を右に傾け様とした次の瞬間に、赤い血を金盥の底に認めた丈である。其間に入り込んだ三十分の死は、時間から云っても、空間から云っても、経験の記憶として全く余に取って存在しなかったと一般である。』⁶⁸⁾と記している。

しかし事態は深刻であったから鏡子はこのことを夏日の危篤として関係者に伝えるため電報を打つ手段をとった。

森田によれば二十四日夜、修繕寺から「センセイキトク」の電報を受け取り愕然とする⁶⁹⁾。電文が「センセイキトク」とあることは鏡子自身が打電したのではないことが知れる。

打電は鏡子の指図で坂元（注・雪鳥）が行い百余通発したことが後に判明する。小宮に対してもこの電報は打たれたが、帰省中の小宮にこの報が届いたのは八月二十五日の午前であった。郵便事情による遅れであった⁷⁰⁾。

夏日の容態が安定し夏目自身が日記を書き始めたのは九月八日であり、日記の冒頭に記したのは俳句3句であった⁷¹⁾。

この3句のうち「別る、や夢一節の天の川」に触れているのは、夏日が静養のために修繕寺に赴く発端にかかわった松根東洋城である。

松根によれば夏日は「病中病後をかけて先生は中々句を作られた。」ということであった。松根はこの句を通じて夏目と自分との間に通い合うところがあると思ったという⁷²⁾。

夏日の句作は、この後毎日なされたのではなかったが、十月十一日に菊屋を離れ東京の長与胃腸病院に移るまでの間、日数にして二十五日も句作を行っており、九月二十七日には、1日に6句作っている。俳句の他に夏目がかなり煩繁に行ったのは漢詩の作詩である。

俳句と漢詩は全く別個なものとして作られたのではなく呼応関係にあったように見られるのも特色である。

さらに、夏日が修繕寺において記した日記と長与胃腸病院において記した日記を比較すると、その日記の内容に大きな変化が見られ、その変化の中で著しいのが長与胃腸病院では見られなかった句作、詩作が修繕寺においては煩繁に見られるということである。それが何に起因するのかは判然としないが、理由の一つに夏目の病状の深刻度がかかわっているのではないかと考えられる。

長与胃腸病院に入院中の夏日は胃の不調に苦しむことはあっても生命の危機に瀕するような重篤な病状に陥ることはなかった。それだけに日記も欠かさず記すことができたし、それ自身が創作であるかのような体裁を示し、且つ内容も詳細であったのに対し、修繕寺のばあい、夏目自身が日記を記すことのできない日があった上に、内容も箇条書きのような形をとることが多く、表現形式も俳句や漢詩による表現が多くなっているのは、やはり死に瀕するような病状に陥ったことが関係するのではないかと推測される。

長与胃腸病院に十月十一日に戻った夏日は日記を毎日記す習慣は持続するが、修繕寺の大患前に入院生活を送っていた時のようには行かなかった。十月十二日は冒頭に俳句を8句記しているが、これは十二日に作ったものとは言えないようだ⁷³⁾。十五日からは4日連続して漢詩を作るが、記述の方は箇条書きの形をとることが多くなる。そして、その箇条書きも十一月六日を過ぎると目立って少なくなる。

その傾向は十二月に入ると一層著しくなり、年末に近づくにつれてその傾向はさらに強まる。以前と比べると夏目の日記とは思えない程の変わり方である。

体調に関する記述としては、不調を訴えるものは少なくなり、十一月二十五日に「午後二時間程寝る。覚めると頭が痛む、晩食後又寝る。八時頃覚めると今度は胸がわるい、そうして頭も依然として痛い。』⁷⁴⁾との記述が目立つ程度である。十二月に入ると容態は安定するが日記の記述は極めて簡略になる。十二月三十一日の日記に記述はなく、したがってその時点での夏目の状況を知ることはできない。

■ 結言

本稿によって明らかにし得た主要点は次の二点にある。

第一点は、夏目の病歴について見る時、精神にかかわる病気と肉体にかかわる病気の二面があり、本稿において考究の対象した時期においては肉体にかかわる病気（それは胃病によって象徴される）が顕著にあらわれ、それは生命の危機というレベルにまで高まって行く過程を明らかにすることが出来た。

第二点は、夏目の生活が教職者から職業的作家となることにより大きな変化をもたらしたことと、夏目の病気がその生活に重大な影響を与え、その結果として変化をもたらすことになる過程を明らかにし得たことである。

注

- 1) 夏目漱石, 入社 of 辞, 漱石全集第21卷所収, 岩波書店, 1979年, 183ページ。
- 2) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第28卷所収, 岩波書店, 1980年, 191ページ。
- 3) 夏目漱石, 虞美人草, 漱石全集第5卷所収, 岩波書店, 1979年, 5～316ページ。
- 4) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第28卷(前掲)所収, 195ページ。
- 5) 夏目鏡子, 松岡譲筆録, 漱石の思い出・前篇, 角川文庫, 昭和35年170ページ。
- 6) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第28卷(前掲)所収, 221ページ。
- 7) 同前書, 233ページ。
- 8) 夏目鏡子, 松岡譲筆録, 漱石の思い出・前篇(前掲), 173～174ページ。
- 9) 岡崎義恵, 漱石の人生構図・「虞美人草」について, 夏目漱石研究資料集成第10卷所収, 日本図書センター, 平成3年, 204ページ。
- 10) 勝本清一郎, 当時における漱石作品のうけとられ方, 座談会明治文学史所収, 岩波書店, 昭和39年, 434ページ。
- 11) 荒正人, 夏目漱石, 現代作家論全集3所収, 五月書房, 昭和32年, 141ページ。
- 12) 同前書, 51ページ。
- 13) 夏目漱石, 坑夫, 漱石全集第6卷所収, 岩波書店, 1979年, 5～199ページ。
- 14) 夏目漱石書簡, 漱石全集第29卷所収, 岩波書店, 1980年, 5ページ。
- 15) 夏目鏡子, 松岡譲筆録, 漱石の思い出・後篇, 角川文庫, 昭和36年, 174～175ページ。
- 16) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第29卷(前掲)所収, 6ページ。
- 17) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表, 集英社, 昭和59年, 472ページ。
- 18) 森田草平, 続夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和18年, 590ページ。
- 19) 同前書, 590ページ。
- 20) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第29卷(前掲)所収, 3～54ページ。
- 21) 夏目漱石, 三四郎, 漱石全集第7卷所収, 岩波書店, 1979年, 5～242ページ。
- 22) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第29卷(前掲)所収, 53ページ。
- 23) 同前書, 59ページ。
- 24) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25卷所収, 岩波書店, 1979年, 57～58ページ。
- 25) 同前書, 58ページ。
- 26) 同前書, 58ページ。
- 27) 同前書, 59ページ。
- 28) 同前書, 61ページ。
- 29) 同前書, 67～68ページ。
- 30) 同前書, 70ページ。
- 31) 夏目漱石, 永日小品, 漱石全集第16卷所収, 岩波書店, 1979年, 52～120ページ。
- 32) 同前書, 12～113ページ。

- 33) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）所収, 80～81ページ。
- 34) 同前書, 80ページ。
- 35) 夏目漱石, それから, 漱石全集第8巻所収, 岩波書店, 1979年, 5～253ページ。
- 36) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）所収, 96ページ。
- 37) 同前書, 96ページ。
- 38) 同前書, 97ページ。
- 39) 夏目漱石, 満韓ところどころ, 漱石全集第16巻（前掲）所収, 128～227ページ。
- 40) 同前書, 227ページ。
- 41) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）, 119～128ページ。
- 42) 同前書, 145ページ。
- 43) 同前書, 149～150ページ。
- 44) 夏目漱石, 門, 漱石全集第9巻所収, 岩波書店, 1979年, 5～200ページ。
- 45) 夏目漱石, 漱石全集第29巻（前掲）所収, 108ページ。
- 46) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表（前掲）, 587ページ。
- 47) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第29巻（前掲）所収, 116ページ。
- 48) 同前書, 119ページ。
- 49) 同前書, 124ページ。
- 50) 同前書, 133ページ。
- 51) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）所収, 166～170ページ。
- 52) 同前書, 154ページ。
- 53) 同前書, 154ページ。
- 54) 同前書, 158～159ページ。
- 55) 同前書, 159ページ。
- 56) 同前書, 164ページ。
- 57) 同前書, 168ページ。
- 58) 同前書, 178ページ。
- 59) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第29巻（前掲）所収, 136ページ。
- 60) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）所収, 189ページ。
- 61) 同前書, 189～190ページ。
- 62) 同前書, 191～192ページ。
- 63) 夏目鏡子, 「思い出す事など」の頃（修繕時大患の思い出）, 漱石全集月報第3号所収, 岩波書店, 昭和3年5月, 4ページ。
- 64) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）所収, 192～193ページ。
- 65) 同前書, 193ページ。但し, 日記を記したのは妻鏡子。
- 66) 同前書, 196ページ。この日は鏡子記録部分の最終日。
- 67) 同前書, 213ページ。
- 68) 夏目鏡子, 松岡讓筆録, 漱石の思い出・後篇（前掲）, 19ページ。
- 69) 夏目漱石, 思い出す事など, 漱石全集第17巻, 岩波書店, 1979年, 40ページ。
- 70) 森田草平, 続夏目漱石（前掲）, 743ページ。
- 71) 小宮豊隆, 修善寺日記, 夏目漱石研究資料集成第8巻所収, 日本図書センター, 平成3年, 294ページ。
- 72) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）所収, 196ページ。
- 73) 松根東洋城, 先生と病氣と俳句, 漱石全集月報第4号所収, 岩波書店, 昭和3年6月, 1ページ。
- 74) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第25巻（前掲）所収, 214ページ。
- 75) 同前書, 227ページ。

追記

引用文中の旧漢字・旧仮名は書名を除き新漢字, 新仮名に改めたことをことわっておきたい。